

# 「人間と生物圏（MAB）」の共生に関する 行動変容に向けた分野横断的実践研究

## 里山ESD研究拠点



### ●上位目標:

「人間と生物圏」の共生を目指し、生物多様性の保全に向けた人々の行動変容を推し進めること

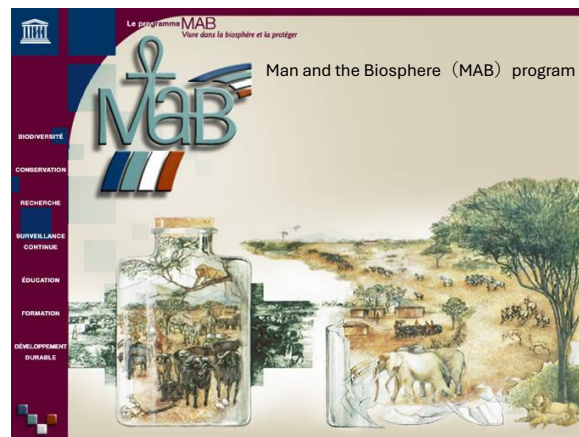
### ●背景:

持続可能な社会を創るためには、生物多様性の減少を止め、回復させる必要がある。これまで経済や社会の発展との二項対立により、生物多様性保全の対策は後手に回ってきたが、自然資本は社会経済の根幹である。

生物多様性国家戦略(2023-2030)の戦略の1つに、**生物多様性に係る環境教育が明文化されたこと**、文科省学習指導要領に「**持続可能な開発のための教育(ESD)を推進すること**」が明文化されたことを受け、人間と生物圏共生(MAB: Man and Biosphere)の理念に基づき、「わたしたち」の理解促進のための教育について検討する。

### ◆MAB(人間と生物圏)計画(UNESCO, 1971~):

自然の恵みを守り、合理的かつ持続可能に利用するための計画。人間を外側に置くのではなく、**生物圏の一員**として位置づけている。



人を自然の外に置く自然観 自然との共生につながる自然観

### STEP① 自然科学の知見と社会通念の融合における行動変容阻害要因の解明

社会通念と自然科学が相互的に繋がり合えると無関心が解消されるのでは？

#### 科学者:

- ・自然科学の知見を伝えれば、理解されるはず
- ・正しく説明しているのになぜ伝わらない？



- “わたしたち”の行動を規定するもの
- ・科学への無関心や忌避感
  - ・慣習、利害
  - ・科学的知見だけではない“何か”

“わたし”と“自然”を別だと考えている

### 生物多様性保全活動取り組み状況(R4 世論調査):

生物多様性保全に貢献する行動として取り組んでいることはありますか  
取り組みたい活動はあるが、行動に移せていない(33.7%)

取り組みたいと思わない(8.7%)

➡42.4%は「なにもしていない」

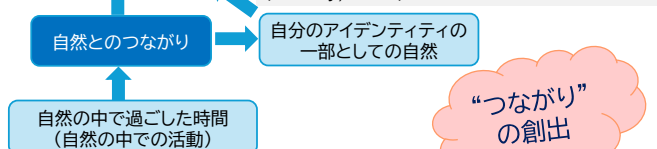
その理由: 何をしたらよいかよくわからないこと(50.7%)

自分一人が行動しても意味がないと感じること(19.3%)

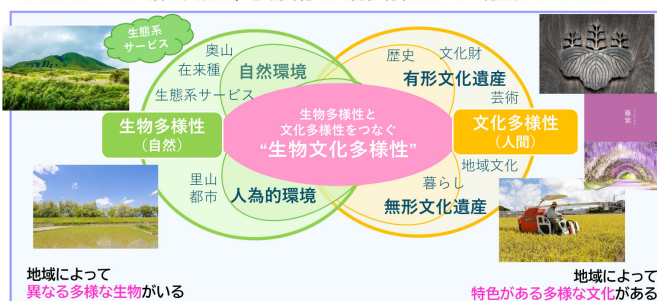
生物多様性、自然や生き物に興味がないこと(2.6%)

生物多様性の危機は自分には関係ないと感じること(2.3%)

自然とのつながりと環境保全行動との関連性を示す概念図:自然の中で過ごした人は自然とのつながりを感じるようになり、自然が自分のアイデンティティの一部となり、環境保全行動をとるようになる。(Krasny,2020)



“わたしたち”の生活や文化は、地域固有の生物多様性によって醸成されてきた



### ●教育実践とプログラム評価

「ものづくり×文化×生物多様性」の分野横断・体験型プログラムの展開



校庭からはじめる生物多様性×生物文化多様性でつくるインセクトホテル〜



植物の“今”を後世に残そう



漢字と葉っぱで遊ぼう



学内の材料で門松づくり



落ち葉と色と文字で遊ぼう

#### 【外部資金】

\*科研費基盤C:異分野融合ESDを創発できる教員養成プログラム開発—生物文化多様性を体験・理解する(2023~2026年度)

\*一般社団法人学びのイノベーションプラットフォーム(PLIJ):校庭の虫から始める生物文化多様性—E-STEAM教材インセクトホテル, WEB教材(2024年度)

\*横浜市環境創造局「市民が森に関わるきっかけづくり事業」よこはま森の楽校(2022年度~) 他

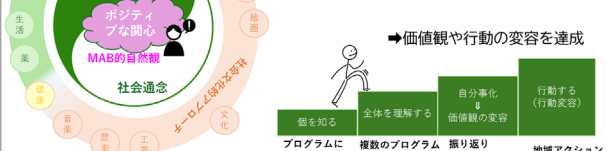
2年間で50講座以上!

### 今後 持続可能な社会に向けて「参画」できる人を増やす

#### STEP② 阻害要因を乗り越えて行動変容につなげるESDプログラムの開発

自然共生社会であった里山を(主)にモデルとして、社会文化的アプローチと自然科学的アプローチからMAB的自然観に帰着するESDプログラムの開発

社会通念と自然科学の知見の相互的な融合によりポジティブな関心を形成



➡価値観や行動の変容を達成

